

「観念」という「病」

アンドレ・ジッドの『パリュード』を通して

西村 晶絵

はじめに

アンドレ・ジッド(1869–1951)は、多くの作品において様々な角度から「病」の問題を取り上げている。例えば、1902年に出版された『背徳者』(*L'Immoraliste*)では、旅先で結核に罹り死に直面しながらも、自らの命に無関心であった主人公ミシェルが、アラブ人少年の健康的な姿を目にしたことをきっかけに、自らの生に執着していく様子が描かれている。しかし、ジッド作品における「病」とは、単に身体的・精神的な不調や異常についての描出を指すわけではない。彼は時に、宗教や医学言説と絡めた仕方でも「病」を扱うことで、「病」とは何かという問いを読者に投げかけている。1919年の『田園交響楽』(*La Symphonie pastorale*)では、目の見えない少女ジェルトリユードと、理性を失いかけた牧師の関係を通して、aveugle(盲目)が俎上に載せられている。また、1911年から24年にかけて出版された同性愛擁護のための作品とされる『コリドン』(*Corydon*)において、ジッドは博物学や歴史、芸術や社会学などを引き合いに出しながら、この性的指向を「病」とする当時の一般認識を覆そうとするのである。

ジッドにおける「病」のテーマを考える上で、これらの作品に先立ち1895年に出版された『パリュード』(*Paludes*)を看過することはできないだろう。タイトルそのものがPaludisme、すなわちマラリアを想起させることから、また作品全体を通じて病のイメージを喚起する表現が散見されることから、『パリュード』においては、まさに病が重要な位置を占めていると考えられるからである。とはいえ、この作品についての従来の研究においては、「病」が分析の中心とされたことはなかった。執筆当時の作家に、彼がそれまで影響を受けてきた象徴主義やデカダンといった芸術や芸術家たちに対する態度に変化が見られるようになったという事実を鑑み、この作品は「世紀末」文学との関係において比較・検討されることが一般的だったからである。しかし、「病」という観点から『パリュード』を検討することは、この作品以降のジッド作品における「病」を考察する際のみならず、このジッドと「世紀末」文学との関係の変化の背景を探る上でも重要な作業であるように思われる。それでは、『パリュード』における「病」とはいかなるものであろうか。また、ジッドはいかなる意図を持ってその「病」を描き出したのであろうか。

このような着眼に基づき、本論文においては、まず『パリュード』の読解を通じ、そこにおける病の表象を示しながら、この物語が病と結びつく作品であることを明らかにする。次に、ジッドと「世紀末」文学との関係や、作家自身の性的指向についての立場をふまえ、『パリュード』を出版する以前の彼の置かれていた状況が、病といかなる連関を持ち、ジッドはその状態をいかに克服したのかを探る。そして最後に、これらジッド自身の経験が『パリュード』と密接に結びついていることを示しながら、「病」という切り口からこの作品をいかに解釈することが可能であるか解き明かしていきたい。

『パリュード』における「病」の表象

『パリュード』は、語り手のある火曜日から日曜日までの様子を描いた作品である。この物語は、次のように語り手の友人ユベールが彼を訪ねてきたところから始まる。

5時頃になると涼しくなった。僕は窓を閉め、再び書き始めた。
6時に親友のユベールがやってきた。彼は調馬から戻ってきたのだ。
彼は言った、「おや！ 仕事をしているのかい？」
僕は答えた、「『パリュード』を書いているんだ」¹。

このように、『パリュード』の語り手は、「パリュード」という作品を執筆中である。本論文においては、便宜上、アルプイの研究において用いられた区別に倣い、ジッドによって書かれた『パリュード』を『パリュードI』、『パリュードII』の語り手によって書かれる「パリュード」を『パリュードII』と表記することとする²。

「語り手」は『パリュードII』を、「これはとりわけ、旅をすることのできない人間の物語なんだ。[...]ティティルスは畑を所有しているのに、そこから出ようとしなくて、むしろそれに満足している男の話なんだ」³と説明する。この「ティティルス」というのは、ウェルギリウスの『牧歌』に登場する羊飼いで、所有する畑が石や沼地に満ちているにもかかわらず、それに甘んじ、幸福すら感じている人物である。『パリュードII』の主人公もまた同様の生活を送っているため、この詩に倣って「ティティルス」と名付けられている。『パリュードII』のティティルスは独身で、

¹ André Gide, *Paludes, Romans et récits I*, « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 2009, p. 261.

² Pierre Albouy, « Paludes et le mythe de l'écrivain », *Cahiers André Gide 3*, Paris, Gallimard, 1972, p. 241–251.

³ *Paludes, op. cit.*, p. 261–262.

「Paludes」というタイトルが示すように、「沼」に囲まれた塔の中で生活し、そこから出ることがないという設定のため、この物語においては大きな展開は見られず、ティティルス単調な生活が描写されているに過ぎない。物語としてはあまりにも退屈に思われるのだが、「語り手」によれば、『パリュードII』の主題はまさに、「倦怠、むなしさ、画一(ennui, vanité, monotonie)」⁴なのである。

「語り手」がこのような作品を執筆しているのは、人々に彼らの生活もまたティティルスのそれと大差ないことを指摘するためである。彼によれば、変化や発展に乏しく、同じことの繰り返しによって成り立っている日常に、我々も甘んじている。したがって、ティティルスは「僕であり、君であり、僕たち皆」⁵の象徴にすぎない。「語り手」はまた、このような画一的な生活に甘んじている人間のことを「盲目(aveugle)」という言葉で表現する。はっきりと物事が見えると、人は自分が不幸であることに気が付かざるを得ない。よって人は、幸福でありたいがために、見えていると思ひ込み、真に見ることを放棄しているというのである⁶。

ティティルスを通して描かれるのが、停滞した状態にありながらも、それに満足している一般の人々であるという点から、「語り手」は、『パリュードII』を「普通の人間の物語(l'histoire de l'homme normal)」⁷であると説明する。しかしながら、「盲目」という言葉を用いて表現していることからわかるように、彼は人々のこのような様子をnormal、すなわち正常な状態というよりはむしろ異常と捉えているだろう。『パリュードII』を書く理由を、「語り手」は恋人アンジェールのサロンに集まった人々を前に、次のように説明する。

[...]私の近くに病気の人がいるのを観たら、私は心配するでしょう。そして、彼らを治そうとはしないまでも、[...]少なくとも彼らに彼らが病気であることを示し、それを伝えようとするでしょう⁸。

「語り手」は、『パリュードII』を通して、人々が「病人」であることを理解させようとするのである。その「病」を、彼は次のように説明する。

今夜ドアに鍵を閉めたのだろうか。それを再び見に行く。今朝ネクタイを締めたのだろうか。触ってみる。今晚ズボンのボタンをしたのだろうか。確認する。[...]人はそれを病によって再びしてしまうのです。回顧病です⁹。

「語り手」によれば、人々は「回顧病(maladie de la rétrospection)」という名の「病」に侵されているがために、日々同じことを繰り返し、それに

満足してしまうのである。

彼がこの「病」を深刻なものとして捉えるのは、それが最終的に個性の消滅につながると考えるからである。例えば、ベルナルという存在について、この人物を毎週木曜日にオクターヴの家にいる人間であると捉えることが可能であるし、その反対に、オクターヴとは毎週木曜日にベルナルを迎える人として認識され得る。このように、日常の行動様式は我々の人格と結びつき、時に人格そのものとなる。ところが、このような行為が他の人によってなされたとしても、そこに大きな差があるとは思われず、「回顧病」に侵された結果、我々は他者によって取って代わられ得る人間となってしまっているのである。こうした事態は、『パリュードI』全体を通して現れる登場人物の多さによっても示されているだろう。この物語においては、約40の人物が登場するが、彼らの大多数はいつか語り手と会話する程度の役割しか担っておらず、その後の場面には現れない。彼らは、他の人物によって入れ替わり得る存在として表象されているのだ。

「語り手」は、このように人々が日常的に同じ行為を繰り返してしまい、結果として没个性的な状態に陥ってしまったのは、彼らが過去の延長上に成り立つ習慣や法律に則って行動しているからだを指摘する。前例から外れた行動をする人は「狂人」と見なされ得るため、人は画一的な行動を余儀なくされているというのである。人々がこのような状況に不満を抱かないことについて、「語り手」は次のように警鐘を鳴らしている。「悪を受容は、それを悪化させます。それは悪習となるのですよ、皆さん。なぜなら、人はついにはそれを気に入るようになってしまうからです」¹⁰。彼によれば、同じことを繰り返しているうちにそれを気に入るようになるという「我々の反復への愛(notre amour des reprises)」¹¹こそが、画一的な生活に甘んじることを可能にしている。したがって、『パリュードII』を通じて「語り手」が訴えようとするのは、「悪習」をもたらず「反復への愛」を断ち切り、「回顧病」を克服する必要性なのだ。

しかしながら、『パリュードI』全体を通して描かれるのは、「回顧病」の存在を指摘しながらも、この病から逃れられない「語り手」自身の姿である。彼は自らについて、「私は人に対して非難しているあらゆる病に、それらを描くにつれて徐々に取りつかれているような気がする」¹²と日記に記す。そして実際にその二日後、彼は単調な日常に変化をもたらすべく、恋人アンジェールと旅に出るにもかかわらず、雨を理由にパリ近郊のモンモランシーまで行っただけで、すぐにパリへと引き返してしまうのだ。病に侵されている「語り手」は、自らが皮肉的に描く『パリュードII』の主人公ティティルス同様、「旅をすることのできない人間」に他ならない。そしてこの旅の失敗を通じ、「語り手」は自分自身もまた過去に縛られていることを認識せざるを得ないのであった。彼はパリに戻ってくると、『パリュードII』を書き上げるという観念に捕らわれている自分を発見し、絶望しながらも再び書き始めてしまうからである¹³。『パリュードI』全体を通じて名前すら明かされ

⁴ Ibid., p. 265.

⁵ Ibid., p. 284.

⁶ Ibid., p. 283.

⁷ Ibid., p. 285.

⁸ Ibid., p. 288.

⁹ Ibid., p. 290.

¹⁰ Ibid., p. 291.

¹¹ Ibid.

¹² Ibid., p. 294.

¹³ 語り手は次のように嘆いている。「Il me semble que je porte toujours Paludes avec moi. [...] / Je le laisse ici ; je le retrouve là ; je le retrouve partout ; la vue des autres m'en obsède et ce petit voyage ne m'en aura pas délivré » (ibid., p. 307).

ない彼の人格を成り立たせるものも、『パリュードII』を書くという行為だけであることも指摘しておこう。そして「語り手」は、この作品を書き上げると、さっそく次の作品を書き始めるのだった。

5時に僕は貧しい人々に会いに行った。それから、涼しくなったので僕は家に帰り、窓を閉め、そして書き始めた。

6時に親友のガスパールがやってきた。

彼はフェンシングから戻ってきたのだ。彼は言った、

「おや！ 仕事をしているのかい？」

僕は答えた、「『ポルダー』を書いているんだ…」¹⁴

「沼」を意味する『パリュード』の後に書かれるのは、「干拓地」を意味する『ポルダー』(« Polders »)という作品であることが示されたところで『パリュードI』は終わるため、その内容については具体的にはわからない。しかしこの『ポルダー』は、「語り手」にとっての「古くからの主題」であり、まさしく『パリュード(II)』の続きとなり、食い違わないようなもの¹⁵であるという。上記の『パリュードI』の最後の数行が、この物語の出だし(本章冒頭の引用参照)と酷似していることからわかるように、生活に変化をもたらすことのできない主人公「語り手」によって話が振り出しに戻され、その後もこのような生活が続くことが暗に示されたところで、『パリュードI』は閉じられる。

『パリュード』を出版する以前のジッドと二つの病

以上のように『パリュードI』は、「盲目」や「回顧病」といった「病」のイメージを喚起する表現によって展開されている。しかしながら、本論文の冒頭で触れたように、この作品における「病」に着目した研究はこれまで見られなかった。ジッドは『パリュード』を執筆する以前、象徴主義作家たることを自認していたが¹⁶、彼はこの作品に「偶然性についての概論」(« traité de la contingence »)という副題を付すことにより、「象徴の理論」(« Théorie du symbole »)を副題とする『ナルシス論』(*Le traité du Narcisse*, 1891)の頃からの作風の転換を図っており、このような変化をふまえ、『パリュード』は一般に象徴主義との関係において分析されてきたからである¹⁷。確かに、平坦で動きのない些細な日常を描き出すこの作品の世界観は、象徴主義に見られる観念的なそれとは相反している。また主人公「語り手」は、「世紀末」文学の登場人物に典型的な内的世界への閉じこもり、労働嫌悪、活動力の欠如、独身といった特徴を備えているものの¹⁸、それらは「回顧病」という病に侵されているがゆえのものとしてアイロニカルに描かれていた。

しかし、象徴主義とは異なる方向性で創作することを目指した『パリュード』において、ジッドがそこに登場する人間たちを「病」と結び付けて描き出したのは、いかなる理由によるものであろうか。「回顧病」を通じて作家は何を示そうとしたのか。『パリュード』を出版する以前

のジッドの状況を明らかにすることが、これらの疑問を解く鍵となるように思われる。『パリュード』以前の彼の関心事は、前述のように、象徴主義をはじめとする「世紀末」文学やその作家たちとの交流であったが、それに加えてこの時期のジッドは自分自身の問題として自慰行為への欲望と葛藤に苦しんでいた。そして、「世紀末」文学と自慰行為は、当時の社会的コンテキストにおいて、密接に病と結びつくものであった。

まず初めに、「世紀末」文学と「病」の関係について見ていくことにしよう。先に触れたように、ジッドが文学を志しその道に入ったばかりの1890年前後の時期に、彼は象徴主義をはじめとする「世紀末」文学の影響を受けていた。象徴主義的作品と見なされる処女作『アンドレ・ヴァルテールの手記』(*Les Cahiers d'André Walter*)を1891年に出版すると、ジッドはマラルメ(1842–1898)やユイスマンス(1848–1907)、ワイルド(1854–1900)といった作家たちから認められ、彼らの陣営の一翼を担うこととなる。この「世紀末」文学は、「病」のイメージと結びつく文学であった。そこに描かれる「病」の性質は多様であり、それらについての綿密な検討は、それ自体で大きな研究テーマとなり得るものであるが、そのような分析は本論文の主旨ではないため、ここでは例を挙げるに留めておくことにしよう。例えば、ユイスマンスによって書かれた『さかしま』(*À rebours*, 1884)のデ・ゼッサントや、ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』(*The Picture of Dorian Gray*, 1890)に登場するドリアンといった人物たちは、美に執着するあまり神経や精神を病んでいく。そして、ジッドの『アンドレ・ヴァルテールの手記』においても、理想的な世界を追い求める主人公ヴァルテールには、「発狂」による最期が待ち構えている。ヴァルテールは、愛する従妹エマニュエルと神の元で魂を通じて一体となることを求めており、魂を汚すものとしてこの世のあらゆる快楽や幸福を排するが、この禁欲主義が彼の精神を蝕んでいくのである。

作品内においてのみならず、実生活においても美や理想の世界を飽くことなく追求した「世紀末」の芸術家たちは、当時の医学者たちの分析対象でもあった。例えば、『犯罪人類論』(*L'uomo delinquente*, 1876)でその名を残すイタリアの医学者ロンブローゾ(1835–1909)は、『天才と狂気』(*Genio e follia*, 1864)において、「医学的」な観点から当時の芸術について論じている。このロンブローゾの説に影響を受けながら、独自の芸術論を展開した医学者として最も重要なのは、ノルダウ(1849–1923)であろう。この医学者の『退廃論』(*Entartung*, 1892–1893)と名付けられた分厚い研究書は、その全ページが当時の芸術についての分析に充てられており¹⁹、その中で彼は、世紀末に起こった

¹⁴ *Ibid.*, p. 313.

¹⁵ *Ibid.*

¹⁶ ジッドは1891年1月26日付のヴァレリー宛ての手紙に次のように記している。「[...] je suis symboliste et sachez-le. [...] Mallarmé pour la poésie, Maeterlinck pour le drame – et, quoique auprès d'eux deux je me sens bien un peu gringaler, j'ajoute Moi pour le roman » (André Gide, Paul Valéry, *Correspondance 1890–1942*, Paris, Gallimard, 2009, p. 54).

¹⁷ 例えば、次のような文献を挙げることができる。Christian Angelet, *Symbolisme et invention formelle dans les premiers écrits d'André Gide*, « Romancia Gandensia », Gent, Belgique, 1982. Jean-Pierre Bertrand, Michel Biron, Jacques Dubois, Jeannine Paque, *Le roman célibataire d'« À rebours » à « Paludes »*, Paris, José Corti, 1996.

¹⁸ Jean-Pierre Bertrand, *« Paludes » d'André Gide*, Paris, Gallimard, 2001, p. 25.

¹⁹ 同著作においてノルダウは、「象徴主義」や「ワグナー崇拜」、「神秘主義」、「デカダンと審美主義」、「フレデリック・ニーチェ」などの見出しを立て、19世紀の芸術や芸術家たちを網羅的に論じようと試みている。

芸術がいかに病的であるかを証明しようと試みている。ロンブローゾにおいては、「天才」のうちに見出される病的な症状は、彼らの作品の重要性を脅かすものではないとされていたのに対し²⁰、ノルダウは「天才」と心身の健康は不可分であるとして、美への耽溺、感情過多、無気力や悲観主義、夢への偏愛といった傾向を示す「世紀末」芸術家たちを「退廃者」と見、反社会的な存在と糾弾することを憚らなかつた。そしてノルダウのこの著作は、大きな議論を巻き起こしながらも、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ヨーロッパ中に広がっていったのであった²¹。

『退廃論』の中で、名指しで「退廃者」の烙印を押された芸術家たちの側もまた、ノルダウの説に対し反論を試みている。1894年にオックスフォードで行われた「音楽と文芸」(« La musique et les lettres »)と題された講演の中で、マラルメはこのノルダウの著作について言及し、この医者と異なる「天才」についての見解を示しながら、この「医学書」を否定している²²。またワイルドは、「私は、全ての天才は正気でないというノルダウ博士の説にすっかり同意します。しかし、ノルダウ氏は正気な人間は皆、馬鹿であるということを忘れているようです²³と、ノルダウの論を逆手にとって、芸術家たる彼自身の存在意義や彼の芸術作品の価値を主張したのである。

このような「天才と狂気」に関する議論や、芸術家と医学者の応酬は、もちろん19世紀に始まったものではない²⁴。とはいえ、19世紀において特徴的なのは、メンデルによる遺伝の法則や、それに影響を受けたダーウィンの進化論といった説がひとたび提唱されると、それらは

社会においてのみならず、芸術においても大きな影響力を持ったということである²⁵。例えば、ゾラ(1840-1902)は『ルーゴン=マッカール叢書』(*Les Rougon-Macquart*, 1871-1893)において、一人の人間を形成する上で、生理的・遺伝的素質や環境が大きな役割を果たしていることを示そうとしたのだ。一方、遺伝の概念を取り入れることによって精神医学や「退廃」の議論が大きな展開を見せた世紀末においては、先のマラルメやワイルドによるノルダウへの応酬が示しているように、芸術家たちは科学万能主義的な風潮に抗しようとするようになる。科学に基づく「正常と異常」、「善と悪」、「光と影」といった二項対立的な物事の見方を、「世紀末」の芸術家たちは作品を通じて揺り動かそうとしたのであり、彼らの作品が病的な精神性を孕んでいたことは、このようなコンテキストにおいて、ある種必然ですらあったであろう。そして創作活動を開始したばかりのジッドもまた、このような「世紀末」芸術の世界に身を置き、この世界観に合致する特徴を持った文学を創作していたのだ。

ジッドが直面していたもう一つの「病」は自慰行為である。自伝『一粒の麦もし死なずば』²⁶(*Si le grain ne meurt*, 1926)や日記の記述によれば、ジッドは幼少の頃から病弱であった。この事実をふまえ、彼は自伝において幼少期について言及する際、自らを「病的に意地の悪そうな様子」をした、「影と醜悪さと陰険さ」に満ちた病的な子供として描き出している。青年期になっても彼の体質は変わらず、彼はしばしば医者や診察を受けている。しかしながら、彼が医者や診断を仰いだのは、頭痛や風邪といった身体的な不調を治そうとする場合に限られなかった。ジッドはまた、その当時「悪癖(mauvaises habitudes)」と呼ばれたタブーとされていた行為、すなわち自慰をも治療しようとしていたのである。この行為は、彼が子供の時から受けてきたピューリタニズムに基づく教育において「悪徳(vice)」とされていたばかりでなく²⁷、当時の医学言説において病と見なされていたのだ。

自慰行為がぜひとも抑圧されねばならぬものと捉えられるようになったのは、18世紀に入ってから、とりわけ18世紀後半から19世紀にかけてとされる。それまで宗教に属する問題とされてきた性的な事柄は、18世紀中頃以降、医学によって盛んに扱われるようになり、この時代、自慰行為についての医学書も数多く出版された²⁸。なかでも重要なのは、1760年に出されたティソ(1728-1797)の『オナニスム』(*L'Onanisme*)であるが、この中で筆者は、自慰行為によってもたらされた「症例」を挙げてそれらを分類・分析しながら、この行為がいかに人体において危険を引き起こすかを「医学的」に説明する。この「医学書」は、その後一世紀以上に渡って、ヨーロッパ中で、自慰に関する一般認識の形成とこの行為の抑圧に、大きな影響力を持つこととなった²⁹。

19世紀に入ると自慰行為についての風当たりはますます強くなり、「科学的」なデータを用いながら、他の仕方では説明できない様々な病理が、自慰行為によって説明されるようになっていった³⁰。また、この「性的倒錯」はアルコールや煙草、アヘン、大麻といった誘惑と同

²⁰ Jens Malte Fischer, « Max Nordau, “Dégénérescence” », Delphine Bechtel, Dominique Bourel et Jacques Le Rider (éd.), *Max Nordau*, Paris, Cerf, 1996, p. 112.

²¹ « Préface » de *Dégénérescence*, rédigé par François Livi (Max Nordau, *Dégénérescence*, Paris, L'Âge d'Homme, 2010, p. 7).

²² Stéphane Mallarmé, « La musique et les lettres », *Cœuvres complètes II*, « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 2003, p. 71.

²³ Chris Healy, *Confession of a Journalist*, London, Chatto & Windus, 1904, p. 133-134.

²⁴ 天才と狂気が近接したものであるという見解は、すでに古代ギリシアの時代にも見られたし(Philippe Brenot, *Le Génie et la Folie*, Paris, O. Jacob, 2011参照)、同時代の医学を攻撃した作家としては17世紀のモリエールの名前がすぐに思い起こされるだろう。

²⁵ William Greenslade, *Degeneration, Culture and the Novel 1880-1940*, New York, Cambridge University Press, 1994.

²⁶ 一般に自伝は、作家が主観的立場から記した伝記であるため、その内容については信憑性が問われる場合もあるが、「一粒の麦もし死なずば」は、ジッドについての伝記や研究書においても、その内容が事実として見なされ引用されているため、本論文においても、この著作をジッドの伝記的事実を確認する上での妥当な参照資料として扱うこととする。

²⁷ 宗教史家のナトルによれば、ピューリタニズムは「いかなる時にもこの世の偽りの慣習や悪徳に対し、より純粋に、より質素に、より善く生きる方法を求める」よう人々を導こうとする精神に支えられており、その教えにおいては、人は穢れなき肉体と魂を求めて、この世における欲求や欲望を捨て去らねばならないとされる(Geoffrey Fillingham Nuttall, *The Puritan Spirit*, London, Epworth Press, 1967, p. 11)。したがって、「自らを純化する(se purifier)」ことを阻む魂や肉体の動揺は、ピューリタンたちにとって破滅を導くものに他ならない。ジッド自身も自伝の中で、「私が受けたピューリタンの教育は、肉の欲求を悪魔の一種だと教えていた」と告白しており、彼における否定的な自慰の捉え方は、この宗教の少なからぬ影響のもと形成されたものであることがわかる。

²⁸ Michel Foucault, *Les anormaux*, Paris, Seuil/Gallimard, 1999, p. 218.

²⁹ Didier-Jacques Duché, *Histoire de l'onanisme*, Paris, PUF, 1994, p. 28. このような見解がある一方で、18世紀においては大きな影響力を持っていたこの著作も、19世紀にはその科学的根拠の乏しさゆえに、すでに批判の対象となっていたという指摘もある(阿尾安泰「18世紀のオナニスム——ティソを中心として——」『言語文化論究』第25号、2010年、53-63ページ)。とはいえ、この著作は18世紀において、フランス語版だけでも31種を数え、ドイツでは8種、イギリスで6種、イタリアで4種の翻訳が出されている。また19世紀においても、フランス語版は32種、ドイツ、イギリス、スペイン、イタリア、ロシアなどで計16種の翻訳が出されていたようである(Theodore Tarczylo, *Sexe et liberté au siècle des Lumières*, Paris, Presses de Renaissance, 1983, p. 291-295)。

³⁰ Didier-Jacques Duché, *op. cit.*, p. 43.

じく、中毒性を持つものとして危険視されるようになる³¹。そして、前述のような「退廃」の議論が巻き起こった19世紀中頃以降は、精神医学者たちによって、自慰行為にふける患者たちが身体的、精神的に墮落した「退廃者」として捉えられることとなった³²。退廃と自慰を結びつけた議論を体系化したのは、精神科医マニャン(1835-1916)である。マニャンの「退廃者」についての研究は、当初、その当時一般的であったアルコール中毒と知的障害についての分析からスタートしていた。ところが1882年に、彼は神経科医シャルコー(1825-1893)と共同で、「生殖器官の倒錯とその他の性的異常」(« Inversion du sens génital et autres perversions sexuelles »³³)と題された一連の論文を発表する³⁴。そこでまず取り上げられたのは、性的異常についてであった。この論文の特徴は、患者の言葉を紹介しながら、倒錯やあらゆる「異常」な性的行動を退廃のカテゴリーに属するものとして解釈し、性についての病理学を誕生させた点にある。

性的行動と精神的な病を関連付けたのはマニャンが初めてというわけではなかった。彼以前の精神科医たちもまた、ある種の性的な行動、とりわけ自慰を、精神的な障害を引き起こす行為と見なしていた。しかし、マニャンとシャルコーによる見解が従来の精神医学者たちのそれと大きく異なるのは、この二人の医学者が性的行動を遺伝的なものとして捉えている点である。彼ら以前においては、ある種の「異常」な性行動は、一時的な錯乱の現れであるとされ、精神的な病を引き起こす要因となり得るという見方が一般的であった。それに対してマニャンらは、性的行動をまず自慰、少年愛、男色、フェティシズム、死体性愛、老人性愛などのカテゴリーに分類した上で分析し、それらをより本質的な病の症状、すなわち遺伝的な病によるものであると結論付ける。その結果、ある種の性の形態は、遺伝的な狂気の現れとされるようになるのである。マニャンらによるこのような新しい論理によって、性的行動の「病理化」が行われたのであった。

自慰を「治療」することがジッドに求められた理由も、このような社会的文脈において捉えることができるだろう。ジッドは、1877年に8歳でアルザス学院に入学するにもかかわらず、授業中に自慰をしているのが見つかり、ほどなく停学処分を受けている。この出来事に際して、ジッドの両親が彼を連れて行ったのは、かかりつけの医者ブルアルデルのところであった³⁵。自伝によれば、自慰行為を行うジッドに対し、この医者は、今後もこの行為を続けるならば外科的手段、つまり陰茎の切除に頼る他なくなると脅したとされる。同書の中で、ジッドはこの脅しがまやかしかであるをその時すぐに理解したと記しているが、とはいえ、彼がこの行為を自らに認めて良いものとは捉えていなかったこともまた事実である。自慰の欲求は、その後もずっと彼を悩ませることとなるからである。

ジッドは自伝の中で、処女作『アンドレ・ヴァルテールの手記』を執筆していた当時に関して、次のように告白している。「私はまた少年時代のあの悪癖に陥った。そしてそれに陥るたびに、新たな絶望に襲わ

れた。多くの恋愛、音楽、哲学、詩情とともに、これが私の『手記』の主題だった³⁶。先に触れたように、この作品においては、理想的な世界を追い求める主人公ヴァルテールが、極端な禁欲主義によって精神を病み発狂してしまう様子が描かれている。この世の中でヴァルテールがとりわけ恐れ、是非とも抑えなければならぬと考えているのは、「肉欲」であった。彼において「不純」な肉体は、「純潔」な魂を脅かすものに他ならないからである³⁷。しかし、ヴァルテールの肉欲は、女性に対してのものではない。彼は「君[エマニュエル]の肉体は僕を気詰りにする。そして、肉の所有は、僕を怯えさせる³⁸」と告白する。また、自らの肉欲を抑える一助となるのではないかと期待し、娼婦の元へと訪れたヴァルテールが得たものは、満足ではなく嫌悪感だけであった³⁹。『アンドレ・ヴァルテールの手記』の全文を読んだだけでは、主人公の「肉欲」が何に向けられたものであるか判然としない。しかしながら、この作品の主題の一つが「少年時代のあの悪癖」であったというジッドの言葉をふまえるならば、それは「自慰」であることが理解される。ジッドは文学の道に足を踏み入れた時期においてもなお自慰への欲求と闘っていたのであり、このような彼自身の状況は『手記』における「病」の表象とも結びついたものであったことがわかる。

価値観の転換点——1893年のアルジェリア旅行

このように、『パリュード』を執筆する以前のジッドは、「世紀末」文学と自慰行為という二つの「病」の中に身を置いており、このような作家自身の状況は、当時の作品とも深くかかわっていた。その一方、『パリュード』に描かれるのは、日常に満足し、過去の延長上に生きることを可能にする「回顧病」という名の病であり、「世紀末」文学や自慰とは異なる性質のものであった。このような変化はいかにして生じたのだろうか。そして、それらの「病」を互に関連付けて説明することは可能であろうか。これらの問いを考察する上で、1893年に友人の画家ポール＝アルペール・ローランスと共に出かけた、アルジェリア旅行でのジッドの経験は重要であるように思われる。

『一粒の麦もし死なずば』によれば、この旅に先立ち二人の青年は、旅行を通じ、それまで彼らの中で支配的であったもの、すなわち「特殊なもの、奇妙なもの、病的なもの、異常なもの」(le particulier,

³¹ *Ibid.*, p. 45.

³² *Ibid.*, p. 47.

³³ *Archives de neurologie*, t. III, n° 7, 1882, p. 53-60, t. IV, n° 12, 1882, p. 296-322.

³⁴ マニャンとシャルコーによる性的行動の研究内容については、次の文献を参照した。Jean-Christophe Coffin, *La transmission de la folie 1850-1914*, Paris, L'Harmattan, 2003, p. 128-141.

³⁵ 当時、ジッド一家がかかりつけにしていたブルアルデル医師は、法医学の創始者の一人として後に名を残す人物である。ブルアルデル自身は衛生学を専門としていたが、法医学はしばしば性的な事柄を研究対象としており、同性愛や自慰といった性的指向を示す者を「異常者」、あるいは「退廃者」として見なす見解の流布に貢献した医学の一分野であった(Malick Briki, *Psychiatrie et homosexualité. Lecture médicales et juridiques de l'homosexualité dans les sociétés occidentales de 1850 à nos jours*, Besançon, PUF de Franche-Comté, 2009 参照)。

³⁶ André Gide, *Si le grain ne meurt, Souvenirs et voyages*, « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 2001, p. 243.

³⁷ André Gide, *Les Cahiers d'André Walter, Romans et récits I, op. cit.*, p. 18-19.

³⁸ *Ibid.*, p. 35.

³⁹ 以下参照。「- Oui, l'étreinte rapide où les sens étourdissent ; - mais cette lente et coutumière besogne ! / - Puis après - quoi ? - de nouveaux ? ô quelle honte ! » (*ibid.*, p. 73.)

[le]bizarre, [le] morbide, [l']anormal)」を脱し、「平衡の、充実の、健康の理想(un idéal d'équilibre, de plénitude et de santé)」に向かって進もうと決心したのだった⁴⁰。にもかかわらず、ジッドは出発前に風邪をひいてしまい、健康への不安が旅行中も彼に付きまとうこととなる。とはいえ、このように出発前に体調を崩したことが重要であったと、彼は自伝において回想する⁴¹。というのも、この新たな土地で見出したアラブ人少年たちの健康的な肉体が、病身のジッドに「健康」についての新たな視野を開かせることとなったからである。彼はビスクラにおいて病床から子供たちを眺めた際のことを振り返り、自伝に「彼らの健康は私を励ました。[...]おそらく、彼らの無邪気な動作や、たわいないおしゃべりによる言外の忠告は、私に今まで以上に生へと身をゆだねるよう勧めたのだ」⁴²と記している。病的な自分の肉体と対照をなす子供たちの健康的な肉体を目の当たりにし、ジッドは自らの「生へと身をゆだねること」に同意するが、それは抑圧の中ではなく、解放の中に生の幸福を見出すことを意味していた。ビスクラにおいて書かれたとされる日記には、次のように記されている。

それで、私は自分の欲望を誘惑と呼ぶのをやめ、それに抵抗するのをやめて、全く反対に従っていくように努力した。[...]禁欲主義の習慣は、初め、私が喜びに向かうのにも努力を必要とするほどのもので、微笑むことさえも容易ではなかった。だが、この努力はなんとわずかな間しか続かなかったことか！ [...]私は、幸せに生きるためには、おそらく気ままに暮らすしかないのだということを理解した。[...]それは長い熱病の後の深い休息だった。かつての私の不安は理解し難いものになった。私は自然がこんなにも美しいことに驚いた。そして私はあらゆるものを「自然」と呼んだ⁴³。

ジッドは、少年たちの健康を目にするこのビスクラに到着する前、スースに立ち寄った際に、少年アリと初めての同性愛行為に及んでいく。性的な事柄に関して、自らを解放することに成功したこの経験や、ビスクラでの少年たちの健康の光景を通じ、ジッドは以後、「悪癖」と呼んでいたものに抵抗するのをやめ、肉体の欲するままに行動することに同意するのである。

とはいえ、アリとの行為を通じ、ジッドは肉体的には少年に魅かれていることを認識する一方で、精神的には「同性愛」という性的指向を完全に認めるにはいまだ躊躇もあった。先に触れたように、同性愛や少年愛といった事柄も、当時は性的倒錯の一形態とされており、これらの行為におよぶ者は「退廃者」と見なされていたからである。そのため、彼はビスクラでメリエムという名の娼婦の元で、性的指向を「再び正常化する(se renormaliser)」ことを試みる⁴⁴。若い娼婦を相手にしたこの企てを成し遂げると、彼は精神的な平静を得、さらには身体的にも病から回復するのを感じるのだった。

この夜の後、私は安らぎと特別な充足感を得た。[...]疑いようもなく、医者のかかる誘導剤以上のことを、メリエムは私に対して直ちになしたのだ。私はこの治療をあえて勧めはしないが、私の場合には非常に強い隠れた神経過敏が関係していたので、この本質的な気晴らしによって私の肺の充血が治り、ある種の精神的な平静が回復したとしても不思議はない⁴⁵。

メリエムを相手にしたこの試みを成功させ得たのは、彼女がまだ若く、女性の体つきになりきっていなかったことや、ジッドが目を閉じて少年を抱いていると空想していたことによるものであり⁴⁶、実際にはその後も彼の性的指向が女性に向かうことはない。しかし、重要なのは、目的を達したことで、彼が心身の落ち着きを得たということである。先に見たように、ジッドは長きに渡り、身体的な不調や「悪癖」と呼ばれる「病」への恐怖に取りつかれていた。ところが、メリエムとの行為を通じて、自分が異性に対して性的不能ではないこと、すなわち「性的異常」ではないことを確認し得たことにより、彼はついに精神的にも肉体的にも「平衡の、充実の、健康の理想」に到達するのである⁴⁷。

これらの経験を経て、彼は、「私は生まれて初めて、死の影の谷間から脱し、生きてるように思われた。そして、本当の生に目覚めたように思われた。そうだ、私は新たな生活の中に足を踏み入れたのだ。[...]私はそれまで決してしたことがなかったような仕方でも聞き、見、また呼吸した」⁴⁸と語る。その結果、フランスに戻ると、ジッドは自分がかつて住んでいた世界について、次のような感想を抱くのだった。

フランスへ戻った時、私は蘇生した人間の秘密を持ち帰っていた。[...]従来の関心事だったことの全てが私にとって重要でなくなっていた。各人のざわめきが死の雰囲気搔き立てるようなサロンや文学サークルの息の詰まる空気の中で、なぜ私はその時まで呼吸できていたのだろう⁴⁹。

アルジェリアにおいて自らの「健康」を発見したジッドにとって、かつて出入りしていた「世紀末」芸術家のサロンやサークルは、それら自体が放つ退廃的な雰囲気によってのみならず、旅行以前の病的な自

⁴⁰ *Si le grain ne meurt, op. cit.*, p. 271.

⁴¹ *Ibid.*, p. 282.

⁴² *Ibid.*

⁴³ André Gide, *Journal I 1887-1925*, « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 1996, p. 176-177.

⁴⁴ ジッドは自伝の中で、メリエムとの行為に及んだ理由を次のように説明している。「[...] si l'on tient à ce que je suivisse ma pente, que c'était celle de mon esprit et non point celle de ma chair. Mon penchant naturel, que j'étais enfin bien forcé de reconnaître, mais auquel je ne croyais encore pouvoir donner assentiment, s'affirmait dans ma résistance, je l'enforçais [sic] à lutter contre, et, désespérant de le pouvoir vaincre, je pensais pouvoir le tourner. » (*Si le grain ne meurt, op. cit.*, p. 282.)

⁴⁵ *Ibid.*, p. 285.

⁴⁶ *Ibid.*, p. 285-286.

⁴⁷ 事実、1894年の春にジッドは旅行を終えてフランスへ戻り、7月に療養のためジュネーブへ出かけるのだが、そこで彼を診察したアンドレ医師は、ジッドの病は彼の神経質にその原因の大部分があったとの見解を示したようである。(Pierre Petit, « Tuberculose et sensibilité chez Gide et Camus », *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 51, juillet 1981, p. 279-292.)

⁴⁸ *Si le grain ne meurt, op. cit.*, p. 288.

⁴⁹ *Ibid.*, p. 293.

分を思い起こさせる点からも、「病」的な場所として認識される。彼においてアフリカが「健康」を象徴するならば、パリは「過去」、すなわち「病」と結びつくのである。

「観念」という「病」からの自由を目指して

これらのことをふまえて、『パリュード』に今一度目を向けるならば、この作品の最後で、語り手の友人ユベールとロランがビスクラに向けて旅立つ場面は示唆的である。先に見たように、主人公は「回顧病」に侵されているために、アンジェールと旅に出るにもかかわらず、実際にはすぐにパリに戻ってきてしまった。しかしその翌日、この旅の失敗を嘆く二人の元に訪れたユベールは、ロランと共にビスクラに向かうことにしたと告げるのだった。詳細については不明だが、『パリュードI』の中で、ロランは「瀕死の人々」に関わる仕事をしている人物であり、ユベールもまた、虚弱な子供たちや目の見えない若者に関わる仕事に携わっていたことが記されている。これら「病人」の元から去るという意味においても、パリからビスクラへ向けて旅立つという意味においても、語り手とは対照的に、ユベールとロランは「健康」へと向かう人物の象徴と捉えることができよう。

このように、『パリュードI』の中で、パリが「回顧病」の蔓延した日常を表し、ビスクラがそれを脱する目的地であるのは、この作品がジッドのアルジェリア旅行と密接に結びついたものであることを示しているだろう。事実、1896年版の『パリュード』に付された後書きからは、この作品の誕生において、同旅行の果たした役割が大きかったことが読み取れる⁵⁰。そして、この旅行における「病」や「健康」の問題の重要性に鑑みれば、その経験はこの作品の「病」とも少なからぬ関係があると考えられるだろう。ジッドは後書きに、「これは、[...]一つの観念の物語である。これは、一つの観念が、ある精神のうちに引き起こす病の物語である」⁵¹と記している。この「観念(idée)」を、彼は次のように説明する。

私は観念を何になぞらえるだろうか。私が子供の脳の中に入れ込もうとしている、この癌の萌芽になぞらえているのである。それはそこに根を張り、子供とは別の寄生する生命のために、子供の健康を吸い上げ、脳を病で満たすだろう⁵²。

この作品のタイトルがマラリアを思わせるように、『パリュード』においては、我々の知らぬ間に体内に入り込んで寄生し、我々を侵していく「病」のようなものとして「観念」が描き出されているのである。

象徴主義芸術家のアルベール・オーリエは、象徴主義芸術作品を、「第一に、観念主義的である。なぜならば、その唯一の理想は、観念の表現だからだ」⁵³と定義している。このように、「世紀末」芸術が観念を重んじたことに鑑みるならば、『パリュード』に描かれる「病」は、

「世紀末」文学と結びつくものであることが理解される。この作品において、「回顧病」として表されていたのは、自らの生き方を変えることのできない人間の状態であったが、アルジェリア旅行から戻ったジッドの目には、観念の中に閉じこもり現実に背を向けてばかりいる「世紀末」芸術家たちもまた、「回顧病」にかかった存在として映ただろう。「世紀末」文学に見られる変化や発展性の欠如こそが、まさにパリの文学サークルの「息の詰まる空気」の原因であることをジッドは理解するのである。観念に侵された「世紀末」文学の様子を、『パリュード』を通じて病の表象と重ねて描き出すことにより、ジッドはこの文学サークルから抜け出し、新たな文学的方向性の可能性を探ろうとしていたと考えられる。

しかしながら、作家がアルジェリアを旅行する中で自らの健康を発見したというエピソードに鑑みるならば、ジッドにおける「観念」は、「世紀末」文学のみならず、彼が旅行以前に縛られていた慣習や社会通念に根差した、物事の考え方という意味合いをも含んでいるだろう。というのも、自らの仕方で「健康」を発見したことにより、ジッドは肉の欲求を醜悪なものとして捉えるピューリタンの教育や、自慰を病とする医学言説こそが、彼の病の原因であったことを理解したからである。アルジェリアにおいて「自然がこんなにも美しい」ことに気が付いたジッドにとって、パリで彼の「病」と見なされていたものは、以後、抑圧すべきものではなく肯定すべきものとなるのである。

このように、病についての価値観を転換するような見解は、『パリュード』においてもヴァランタン・ノックスという人物のセリフの中に見出すことができる⁵⁴。

我々は他人から自らを区別するものによってのみ価値があるのです。特異体質が我々の価値ある病なのです。言い換えれば、我々において大切なのは、我々各人だけが持っているもの、他の誰にも見出すことができないもの、例の「普通の人間」が持たないもの、つまり、あなたの方が病と呼んでいるものなのです⁵⁵。

先に見たように、『パリュードI』において「普通の人間(l'homme normal)」は、「回顧病」という病に侵された没個性的な存在として描かれていた。それに対し、「特異体質(idiosyncrasie)」としての「病」を持った人間は、個性を持った存在として捉えられているのである。『パリュード』を通して表される normal や maladie についての既存の認識を覆すような見解からは、「異常」として見なされているものも、見方を変えれば個性の一形態となり得ることが示されている。そこには、従来「病」として捉えられていた性的指向も、むしろ個人の価値ある体質として肯定しようとする、ジッドの意図をも読み取ることができるだろう。

⁵⁰ « Postface pour la nouvelle édition de *Paludes* et pour annoncer *Les Nourritures terrestres*, *Romans et récit I*, op. cit., p. 322–323.

⁵¹ « C'est l'histoire d'une idée [...] ; c'est l'histoire de la maladie qu'elle cause dans tel esprit », *ibid.*, p. 325.

⁵² *Ibid.*, p. 325–326.

⁵³ « I°, *Idéiste*, puisque son idéal unique sera l'expression de l'Idée » (G.-Albert Aurier, « Le symbolisme en peinture. Paul Gauguin », *Mercur de France*, t. II, n° 15, mars 1891, p. 155–165).

⁵⁴ この登場人物を、精神科医とする見方もある (Jean-Pierre Bertrand, op. cit., p. 86 参照)。

⁵⁵ *Paludes*, op. cit., p. 288.

以上のことから、『パリュード』に描かれている「病」は、「観念」と結びつくかつてのジッドの二つの病との関係において解釈されるものであること理解される。この作品には、アルジェリア旅行がもたらした、ジッドと「世紀末」文学との関係の変化のみならず、性的事柄についての捉え方の変化に関わる当時のジッドの精神性が反映されていると見ることができるのである。

結論

本論文では、『パリュード』という作品が、「病」のイメージを喚起する表現によって展開される物語であることを示した上で、この「病」はいかにして分析され得るものかを検討した。その中で、この作品に描かれる「病」は、ジッドがこの作品を執筆した当時の状況と大いに関係していることが明らかとなった。『パリュード』を出版する以前、彼は「世紀末」文学と自慰という二つの「病」に侵された存在であった。しかし1893年のアルジェリア旅行は、彼に以前の自分が「観念」に縛られていたことを理解させ、そこから自身を解放することを可能にしたのだった。新たな仕方でも物事を見るようになったジッドは、過去の

自分と決別し、以後、新たな生を生きようとするのである。

このようなジッドにおいて、過去の延長上に成り立つ「観念」は退けるべきものとなる。彼は『パリュード』を通じて、過去の延長上に生きる人間の姿を「回顧病」に侵された存在として描き出すことにより、「観念」に捕らわれた「世紀末」文学や、宗教や医学言説などに基づく「観念」に縛られた状態を、「病的」なものとして表したのであった。そしてその反対に、一般に病と見なされているものであっても、一つの個性として捉え得ることを示す先のヴァランタン・ノックスのセルフを通じ、「観念」から自由になることが、画一的な生ではなく、個々人の多様な生につながることを示すのである。ジッドはこの作品を遂行中の1894年に、日記に次のように記している。『パリュード』は、[...]病人の作品だったように思われる。これは私が今健康だということの逆の証拠だ。[...]ついに私は、これを私に書かせたものにはやがてまなくなった⁵⁶。様々な「観念」に捕らわれていた「病的な過去」を脱しようとしていたジッドは、『パリュード』において、「観念」に縛られた人間の状態を「病」と結び付けて描きながら、それらからの自由のうちに、自らの生活のみならず、自らの文学の新たな道筋を開く可能性を模索していたのではないだろうか。

フランス語要旨 *résumé*

La « maladie » de l'« idée »

Remarque sur *Paludes* d'André Gide

NISHIMURA Akie

Dans ses œuvres, André Gide (1869–1951) aborde la question de la « maladie » sous de multiples aspects. Toutefois, il ne s'agit pas tout simplement de la variété des maux physiques et mentaux. En effet, l'écrivain traite souvent ce thème en le liant au christianisme ainsi qu'au discours médical contemporain dans le but de remettre en question la notion de « maladie ». Or, lorsque nous nous intéressons à ce sujet chez Gide, nous ne pouvons pas négliger *Paludes* (1895). Même si les recherches qui ont remarqué ce point restent rares, cette œuvre semble en effet contenir de nombreuses images relatives à la « maladie », d'ailleurs le titre de l'œuvre renvoie au terme de paludisme, qui est une maladie parasitaire.

Dans cette étude, nous tenterons donc tout d'abord de démontrer que *Paludes* est bien un texte se rapportant à la « maladie ». Ensuite, en tenant compte du rapport de l'auteur avec la littérature « fin de siècle », ainsi que de sa position à l'égard de ses propres désirs sexuels, nous essaierons d'éclaircir les « maladies » de Gide auxquelles il a été confronté avant de publier

Paludes ; cela nous permettra aussi de comprendre sa manière de les surmonter. Enfin, en montrant que ces expériences sont étroitement liées à *Paludes*, nous nous proposons d'expliquer de quelle façon nous pouvons interpréter cette œuvre du point de vue de la « maladie ».

Paludes est le récit d'une tranche de la vie quotidienne d'un homme, qui est aussi le narrateur de cette histoire. Il est en train d'écrire une œuvre intitulée « *Paludes* ». Le héros, Tityre, est un homme célibataire vivant tout seul dans une tour entourée de marais, mais il n'a jamais pensé à sortir de cette situation. Ainsi, « *Paludes* » ne présente ni grande action ni perspective intéressante ; seule est décrite la vie monotone de ce personnage.

Pourtant, d'après le « narrateur », ce qui est représenté par Tityre, « c'est moi, c'est toi – c'est nous tous... », tout un chacun se contentant, comme ce personnage, de sa vie routinière. Dans cette mesure, le « narrateur » présente « *Paludes* » comme une « histoire de l'homme normal ». Par contre, il ne considère pas la situation de l'homme comme « normale ». Car, à son avis, nous réitérons chaque jour les mêmes actes et nous pouvons nous en contenter, pour la simple raison que nous sommes atteints de la « maladie de la rétrospection ». Il insiste donc, en écrivant « *Paludes* », sur la nécessité que l'homme surmonte cette maladie en manifestant son mécontentement devant sa situation.

Néanmoins, ce qui est exposé à travers *Paludes*, c'est la figure même du « narrateur » qui ne parvient pas à échapper à cette maladie. Étant captif de l'idée d'achever « *Paludes* », il ne peut pas changer sa manière de vivre. Et après avoir terminé

⁵⁶ *Journal I 1887–1925, op. cit.*, p. 179.

« *Paludes* », il commence la rédaction d'un nouvel ouvrage qu'il intitule « Polders ». Ainsi se termine *Paludes*, en revenant au point de départ de l'histoire, tel un cycle infini.

Pour quelle raison alors Gide représente-t-il ce type de « maladie » dans *Paludes* ? Que veut-il montrer par la « maladie de la rétrospection » ? Il nous semble que ces questions ont un rapport étroit avec la situation dans laquelle Gide se trouvait avant la publication de ce texte. En effet, à cette époque, il était hanté par deux « maladies » : la littérature « fin de siècle » et l'onanisme.

Expliquons tout d'abord la maladie de Gide qui concerne la littérature « fin de siècle ». Au début de sa carrière, l'écrivain a subi l'influence de la littérature « fin de siècle » telle que symbolisme et décadentisme. En fait, cette littérature caractérisée par le goût de l'étrange ou par la recherche de l'artificiel est plus ou moins attachée à une sensibilité malade. Et ces artistes, qui vivent le plus souvent en marge du monde en se cantonnant dans un univers idéal, sont effectivement considérés, par les médecins contemporains, comme des individus malades. Avant la publication de *Paludes*, Gide fréquentait ce monde littéraire qui est étroitement lié à la « maladie ».

Une autre sorte de « maladie » que Gide a éprouvée est l'onanisme. Selon l'écrivain, il avait souvent affaire aux médecins au cours de sa vie à cause de sa constitution chétive. Pourtant, lorsqu'il les consultait, ce n'était pas seulement pour faire soigner ses maux bénins, c'était aussi pour « être guéri » de l'onanisme. Car, ce comportement était considéré non seulement comme un « vice » selon les préceptes du puritanisme dont l'écrivain était imprégné depuis son enfance, mais aussi comme une « maladie » dans le discours médical contemporain. Dans ce contexte, Gide a été pendant longtemps obsédé par la peur de cette maladie.

C'est à travers son voyage en Algérie en 1893, que Gide a réussi à se dégager de ces deux « maladies ». Juste avant de partir, il avait pris froid, et son état de santé a même empiré pendant son périple. Cependant, lorsqu'il est arrivé à Biskra, il a découvert de jeunes Arabes dont la forme physique contrastait avec sa propre santé fragile. D'après Gide, ce spectacle de leur santé l'a vivifié, et à partir de ce moment, il a consenti de s'abandonner davantage à la vie. D'ailleurs, avant d'arriver à Biskra, il avait eu son premier rapport homosexuel à Sousse avec un garçon arabe ; s'étant ainsi laissé aller à ses désirs, il avait éprouvé une grande joie.

Cependant, comme il hésitait encore à se laisser aller totalement au désir homosexuel, il a tenté une « normalisation » de son inclination sexuelle auprès d'une courtisane de Biskra. Tentative réussie puisqu'il est parvenu à une certaine tranquillité d'esprit et s'est senti guéri de la maladie physique dont il souffrait depuis son départ. Comme cette courtisane avait aidé Gide à effacer ses préoccupations face à ses penchants sexuels, c'est-à-dire son impuissance par rapport aux femmes, il a enfin trouvé l'« idéal d'équilibre, de plénitude et de santé » qu'il désirait obtenir.

Lorsque Gide est rentré à Paris, il n'a pas pu s'empêcher d'éprouver du dégoût pour le monde dans lequel il avait vécu

auparavant. Aux yeux de Gide qui est entré « dans une nouvelle existence » à la faveur de son voyage, les cercles des écrivains « fin de siècle » lui semblaient des endroits morbides, remplis d'atmosphère décadente qui lui rappelaient son être souffreteux d'autrefois.

Ces expériences ne semblent pas étrangères à la conception de *Paludes*. En fait, dans la postface de cet ouvrage, Gide suggère qu'elles sont étroitement liées à ce texte. Et étant donné l'importance de la maladie vécue durant son périple, nous pouvons supposer que ce fait est également attaché à la « maladie » décrite dans *Paludes*. En effet, l'écrivain écrit dans la postface, « C'est l'histoire d'une idée [...] ; c'est l'histoire de la maladie qu'elle cause dans tel esprit ». D'après lui, l'« idée » est une espèce de « germe cancéreux dans un cerveau d'enfant [...] ; c'est là qu'il étendra ses racines ; il l'emplira de maladie suçant la santé de l'enfant pour sa vie autre et parasite ». Par son titre, qui renvoie aussi au paludisme, *Paludes* représente l'« idée » comme une sorte de maladie, qui parasite, à notre insu, notre corps et qui l'altère graduellement.

Si nous tenons compte de la définition de l'artiste symboliste A. Aurier, selon laquelle l'œuvre d'art symboliste doit être « Idéiste, puisque son idéal unique sera l'expression de l'Idée », nous pouvons comprendre que l'« idée » de *Paludes* concerne le symbolisme. Aux yeux de Gide, de même que le « narrateur » de *Paludes* qui ne peut pas changer sa manière de vivre, les littérateurs « fin de siècle » qui tournent toujours le dos à la réalité pour s'enfermer dans l'« idée » sont atteints de la « maladie de la rétrospection ».

Toutefois, nous pouvons noter que l'« idée » gidienne concerne également son ancienne manière de penser, étroitement liée à ce quoi il avait été astreint. Car, ayant recouvré la « santé », à sa manière, durant son voyage en Algérie, il a compris que l'origine de sa « maladie » était l'« idée » basée sur l'enseignement puritain qui faisant « un monstre des revendications de la chair » et, celle construite sur le discours médical qui considérait l'onanisme comme une maladie à guérir. Étant donné que l'émancipation de ce type d'« idée » permet à Gide de voir les choses différemment, ce qui est traité comme une « maladie » n'est plus à réprimer mais à apprécier. Cette manière de penser se trouve également dans *Paludes* à travers le rôle de Valentin Knox qui affirme, en rompant avec les idées établies sur la maladie et la santé, l'« idiosyncrasie » est une sorte d'individualité.

De ce fait, nous pouvons interpréter la « maladie » dans *Paludes* à travers la position de Gide par rapport à l'« idée » qui a changé avant et après son voyage en Algérie. En effet, pendant la période d'élaboration de *Paludes*, en 1894, Gide a écrit dans son journal intime : « Il me semble que *Paludes* était une œuvre de malade [...]. C'est une preuve, retournée, que je vais bien à présent. [...] Enfin je ne souffre plus de ce qui me poussait à l'écrire [...] ». De ce point de vue, il nous semble que Gide, qui cherchait à dépasser son « passé » malade emprisonné par l'« idée », tentait d'ouvrir sa propre vie et sa propre littérature, en décrivant la figure de ce type d'homme dans *Paludes*.